

# JAF AE Newsletter



No. 17 (July 2005)

## 第 17 回全国大会 / 兵庫県立大学にて開催

### プ ロ グ ラ ム

- 日時：2005年6月25 日（土）  
 場所：兵庫県立大学神戸学園都市キャンパス  
 （旧神戸商科大学）三木記念講堂  
 大会総合司会： 日野信行（大阪大学）  
 10:00 開会の辞：末延岑生（兵庫県立大学）  
 会長挨拶：本名信行（青山学院大学）  
 10:10-11:30 特別講演：  
 「ことばの寛容性と英語教育  
 —英語エラー学の立場から」  
 末延岑生（兵庫県立大学）  
 11:30 会員総会  
 13:30-15:00 研究発表  
 司会：竹下裕子（東洋英和女学院大学）  
 1. インドの英語教育の現状と課題：特にNational  
 Curriculum Framework for School Education  
 について  
 榎木蘭鉄也（秋田県立大学）  
 2. 英語母語話者とWorld Englishes  
 —非母語話者の英語への態度調査より—  
 岡部大祐（青山学院大学大学院修士課程修了）  
 3. ハワイ・クレオール英語の言語的特徴  
 —語彙と名詞・代名詞を中心に—  
 中山行弘（摂南大学）  
 15:20-17:20 シンポジウム  
 「東アジアの小学校英語教育から学ぶ」  
 司会：大原始子（桃山学院大学）  
 「小学校英語教育について」  
 山田雄一郎（広島修道大学）  
 「韓国における小学校の英語教育政策」  
 樋口謙一郎（早稲田大学）  
 「返還後の香港における小学校の英語教育政策」  
 原隆幸（明海大学大学院）  
 「台湾における小学校英語導入後の状況について」  
 相川真佐夫（京都外国語短期大学）  
 17:30 閉会の辞：橋内 武（桃山学院大学）  
 17:45 懇親会（兵庫県立大学 生協食堂）

### JAF AE全国大会レビュー

橋内 武（桃山学院大学）

2005年6月25日（土）に、JAF AEの会員は神戸の兵庫県立大学学園都市キャンパス（旧神戸商科大学）で再会した。この第17回大会には2つのハイライトがあった。午前の部では開催校の末延岑生教授による特別講演「ことばの寛容性と英語教育—英語エラー学の立場から」、午後の部ではシンポジウム「東アジアの小学校英語教育から学ぶ」である。

この特別講演は、神戸商科大学に37年間勤務して今年度末で定年を迎える末延氏の最終講義であった。それゆえ、市民や学生に高校生の参加まであって大盛況であった。講演内容は氏のこれまでの教育・研究の集大成というところがあり、「手抜きうどん」、「交通安全なし」など一見奇妙に見える屋外掲示の意味分析や「誤り」に寛容な英語プレゼン授業の実践報告（VTR）をも交えながら、「英語エラー学」を打ち立てた氏独特の英語教育観が開示された。「二ホン英語」研究の開拓者として、さらなるご活躍を祈念したい。

午後の部には、研究発表3本とシンポジウムがあった。初めの発表予定者 Z. N. Patil 氏の来日ならず、急遽榎木蘭鉄也氏（秋田県立大学）が登壇し、「インドの英語教育の現状と課題—特に National Curriculum Framework for School Education について」報告した。近年インドは IT 産業を軸に経済活動が活発化しているが、インド人の技術力・学力は勿論のことその英語力で欧米企業の注文に応じることができる。この国の英語教育には、3種の学校制度（州・中央政府・私立）があって、3言語政策（母語・ヒンディー・英語）が採られているから、総人口の約2割が英語を話し、都市人口の4割が英語人口だという。1990年代に世界のコールセンターになり得たのも、むべなるかなと思われた。

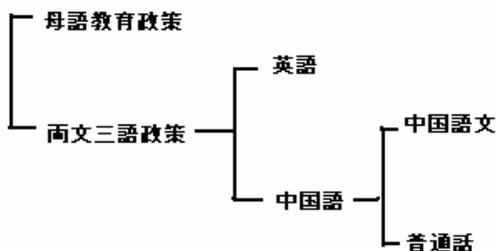
次いで、岡部大祐氏（青山学院大学院修了）の「英語母語話者と World Englishes」は、昨年実施した英語話者の英語教師による非英語母語話者の英語

(NNE)に対する態度調査報告の一部である。質問は25項目からなる。①英語の国際化、②コミュニケーションツールとしての英語、③言語は変化するという特質への認識があるため、NNEへの肯定的態度が認められた。だが、肯定的態度と好意的態度とは一致しない。NNEのアイデンティティーへの言及がないということは、そこまで思いが至らないということであろう。

研究発表の3番手には、中山行弘氏(摂南大学)が現れ、「ハワイ・クレオール英語の言語的特徴—語彙・名詞・代名詞を中心に」について、一般アメリカ英語と比べながら記述した。「世界の英語」の一つとしてハワイ・クレオール英語(地元では「ピジン」)を記述しようとする意図は十分汲み取れるが、やや羅列的な解説に終わった憾みがある。

プログラムの最後を飾ったのは、時期に適ったシンポジウム「東アジアの小学校英語教育から学ぶ」(司会・大原始子氏)であった。これは言語政策研究分科会(代表・河原俊昭氏)の活動の一環として企画されたものである。以下日本に遠い所から近い所へ順に並べていく。

原隆幸氏(明海大学大学院博士後期課程)は「返還後の香港における小学校の英語教育政策」を下図のようにまとめた上で、英語と普通話の担当教師に対してベンチマークテストが導入されたことを報告した。ねらいは語学教師の力を向上させることにあるという。



相川真佐夫氏(京都外国語短期大学)は、「台湾における小学校英語導入後の状況について」報告した。台湾では2001年度より英語が小学5年生から正課として導入されたが、導入後5年目に当たる2005年度からは開始学年を3年生に引き下げた。そのためには、多様な方策で必要な小学校英語教員を確保した。すでに中学には小学校で英語を学習してきた生徒が入ってきているが、相川氏の台北調査(2003~2005)によると、中学校の英語教員は生徒が「スピーキング・リスニングに優れ」、「英語を口に出そうとする意欲が高い」と答えている。台北市の小学

校では、すでに小1から英語を導入している。

樋口謙一郎氏(早稲田大学)は、政治学の観点から「韓国における小学校の英語教育政策」について報告した。周知の通り、韓国では1997年3月から小学校で英語を必修科目として3年生(週2時間)から順次導入し、2000年には学年進行により6年生まで導入した。2000年からは小学校1年から導入されるようになった。これらの事実は、①韓国語の国際プレゼンスの弱さ、②大統領制という強いリーダーシップ、③1982年から特別活動の一環として15年間小学校で教えられてきた経験などの下地も考慮すべきだということである。

山田雄一郎氏(広島修道大学)は言語政策学の知見と哲学的思索から「小学校英語教育について」論じた。日本にも「小学校に英語を」という動きがあるが、それは①「顔のない大衆」の願望であって、②大衆の「気分」を少数者の「論理」で封じ込めることは困難である... ③「群集の人」ではなく、「意志をもつ多数」を育てることが大切であるという私見を吐露した。自身は慎重派ではあるが、発達心理学の知見から判断すると、始めるのならば小5からであろうとした。

## 特別講演レビュー



末延孝生氏(兵庫県立大学)

### 「ことばの寛容性と英語教育

#### —英語エラー学の立ち場から—

加藤三保子(豊橋技術科学大学)

今回の特別講演は、大会の会場となった兵庫県立大学の末延孝生氏のご自身の最終講義も兼ねておこなった。末延氏は長年の教育・研究生活を「英語エラー学」(Errorology)の構築と「二ホン英語」の有効性を説くことに捧げてこられた。

講演では、まず、わたしたちの脳が「ことば」に対してどのようにはたらいっているのかが語られた。

氏自身が町中で見かけた看板文字や注意書きがスライドで示されたが、それらは文字がほとんど消えかけているもの、唐突な表現のもの、意図的にネガティブなことばが書かれているものなど、大変ユニークなものばかりであった。しかし、わたしたちはそのひとつひとつを見て、メッセージの全体を把握し、発信者が意図することが理解できた。つまり、ヒトの脳は驚くほど鋭い類推力、分析力を有し、不足していることばや、裏に隠されたメッセージを無意識のうちにキャッチする能力をもっているのである。

末延氏は、ヒトがもつこのような能力を英語教育にも結び付けて、日本人が陥り易い「完璧主義」の英語教育に反論を唱え、ネイティブのように完成した英語を操れなくても、日本語と日本文化を基盤にした「二ホン英語」でも十分にことばとして機能し、メッセージを伝えることができると述べた。

日本人が英語の聴き取りを苦手とする理由はいくつかあるが、末延氏はその一つとして日本語の発音が影響する例をあげた。日本人は元来、一つの子音だけを単独に使うことが少ないので、英語の語尾にあらわれる弱音節部の子音は聴き取りにくい。たとえば、STOP という語は、日本人には「スト」にしか聞こえないのである。このような子音削除の現象が、文章の聴き取りで起こると、ところどころで語と語のつなぎ目に欠落部分が生じ、文章全体の意味が聞き取れなくなる。

また、日本人が英語を話すとき、母音を添加する例もあげられた。DIFFICULT を日本人はDIFIKARUTO (ディフィカルト) と発音するのである。これでは外国人にはわかりにくいかもしれない。しかし、子音削除も母音添加も、いわば日本語の発音からくる自然な現象であり、これこそが「二ホン英語」のひとつの特徴なのである。これを「誤り」とか「恥じ」と考えず、日本人自らが生み出した英語の変種として、国際場面でも堂々と使用してはどうか。

講演の後半では、末延氏が担当する英語授業の様子がビデオで紹介された。学生は発音や文法にエラーがあってもとがめられず、メッセージを相手に伝えることを最優先して英語と向き合っていた。彼らは、黒板に示した統計資料を指し示しながら、たとえばブロークンであっても臆することなく英語でプレゼンテーションをしていた。

自分の英語に対する意識がどのように変化したか、学生にアンケートをとった結果、最初は自分の英語を「下手だと思う」と答えていた学生の多くが、最

後の授業を終えるころには「下手だとは思わない」と答えるなど、全体でおよそ7割の学生は、程度の差はあれ英語に対する意識がプラスに向いた。エラー・フリーの授業をとおして、学生が自分の英語に自信をもたれたことがわかった。末延氏がエラーに対して寛容であるのは、学生に自信をもたせるためばかりではない。エラーを通して新しい「二ホン英語」を発見することもできるのである。

末延氏のまわりには、いつも笑いが耐えない。天性の明るさと、他を思う優しいお人柄、そして「二ホン英語」の有効性を一貫して追求する姿勢は多くの人を魅了し、会場にはたくさんの「末延ファン」が集まった。今秋から中国へ渡り、現地の大学で客員教授として教壇に立たれるとのことであるが、いつかまた本学会で「中国英語」についてお話いただけることを願っている。

## シンポジウム「東アジアの小学校英語教育から学ぶ」を終えて

大原始子 (桃山学院大学)

第17回大会プログラムの最後に、学会内の言語政策研究分科会の活動の一環としてシンポジウムを持った。「東アジアの小学校英語教育から学ぶ」というテーマで、4名の研究者から最新の状況を伝える熱のこもった発題がなされた。

山田雄一郎氏 (広島修道大学) からは、マクロ的に2つの視点を対立させながら、日本の英語教育を取り巻く状況や問題点が分かりやすく提示された。言語教育そのものに立ち戻り、日本の英語教育を受ける側と施策する側、双方に対する警鐘も含め、日本社会における英語教育の必要性とともに慎重な姿勢が示された。

樋口謙一郎氏 (早稲田大学) からは韓国の教育事情について、切れ味良く興味深い報告がなされた。私事であるが、大学院に入ったばかりの頃、アジア政治の先生と「言語政策」にまつわる話をしたことがある。言語政策研究は社会言語学の仕事になりつつあったが、政策分析において政治学にかなわない部分があることを知った。言語系では「施策の結果」を扱うのに対して、政治学では「施策の過程」を分析するのである。氏の報告を聞いていて、ふとそれを思い出した。後で、氏は政治学を修められたと聞いた。これからの言語政策研究において、言語系と政治系の研究者が手を携えることが求められるであろう。

原隆幸氏（明海大学大学院）からは、返還後の香港、特に英語教育をする側に焦点を当てた報告があった。返還以降、規範となる標準中国語教育が進められたことによって、英語の地位、教育内容がどのように変化したのかしなかったのか、外部の者には姿が見えてこない部分があったが、報告で教師の技量に関わる「ベンチマークテスト」の具体的な内容が取り上げられたことによって、現在の香港が新たな動機のもとで英語教育に力点をおき始めたことが明かに浮き彫りになったと思う。

最後に、相川真佐夫氏（京都外国語短期大学）から台湾の英語教育に関する報告がなされた。報告は2つの柱、小学校教員に関わる政策の紹介と中学校における変化から成った。小学校の英語教育の導入を受けての中学校における変化では、教員に行われたアンケート調査結果の一部を用い、能力ではスピーキング、リスニングの向上と、英語学習への積極的姿勢などが、説得力ある形で提示された。教育をおこなう側の客観的評価は、今後貴重な基礎データとなるであろう。



これらを受けて、議論に入ったが、テーマの大きさを感じた。司会としては、時間が少なかったという反省が残る。関心の高さを感じる反面、日本では英語教育の導入方法や対応について、推進派と慎重派が向き合ってまだ十分論議し尽くされていないのではないかという印象も残った。各氏に、日本の英語教育への提言をお願いしていたが、日本の英語教育においてはいずれも欠かせない視点であった。シンポジウムを通して、各国家・地域の言語教育政策の優れた研究が、当該地域にとどまらず、日本の言語教育政策にも貢献でき得るものであることを知っていただければ、言語政策分科会メンバーとして目的のひとつは果たせたと思う。

## 新会員の学会感想

加賀田哲也（大阪商業大学）

今回初めて参加させていただきましたが、エラ

学の権威者、末延孝生教授の最終講義と重なり、師の37年間の研究の足跡を拝聴できたことはとても光栄でした。具体的なエピソードや実践例を提示されながら、「二ホン英語」にもっと自信を持って欲しい、という氏からの強いメッセージは私にとって、とても斬新で今後の我が国の英語教育を揺さぶる原動力になるのではないかと感じ取りました。そのあと、3つの研究発表があり、最後に「東アジアの小学校英語教育から学ぶ」という演題でシンポジウムが行われましたが、卑しくも小学校英語教育を手掛けている私にとって、「言語政策」という視点から韓国、香港、台湾の小学校英語教育の現状や課題を詳細にわたり知ることができたことは非常に貴重な機会となりました。我が国の小学校英語を考える上で、参考になるところが多々あったように思います。学会終了後の懇親会ではお酒を飲みながら親睦を深め、さらなる議論を交えることもできました。末延教授のご健勝をこころから祈念致します。

## ことばの多様性について

仲 潔（九州女子大学）

大阪で生まれ育った私が、九州女子大学への赴任のため福岡に移り住んでから、いわゆる「九州弁」とやらの新鮮な響きに関心が高まっている。もちろん同じ九州であっても、その差異は大きい。「地域語の連鎖」という社会言語学の概念にもあるように、ことばというものは少しずつ異なる特徴を有したものがグラデーションのように連なっている。「関西弁→大阪弁→河内弁…」 「九州弁→福岡弁→博多弁…」のように下位分類しだしたらきりが無い。人工的・意図的に線引きをすることで、新たな「〇〇弁」が出来上がるのだ。

ところが、この様な認識は一般的ではない。九州・沖縄地区の様々な地域から学生が集まっているが、彼女たちは「私は〇〇弁です」という認識を共有している。彼女たちには「日本語」という想像の共同体があり、その下位分類されたものとして「〇〇弁」があるわけだ。しかも「〇〇弁」はあたかも均質的な地域語として認識されているようだ。さらに、そういった差異が、知的好奇心を喚起するのではなく、時として「笑い」のタネや「恥ずかしさ」の元にさえなっているようだ。

「英語」の多様性を研究するものとして、こうした日常の「ことば」に対する学生の言語観は興味深い。同時に、自らの研究そのものがどのような政治的意味を有するのかを意識せざるを得ないと感じる。

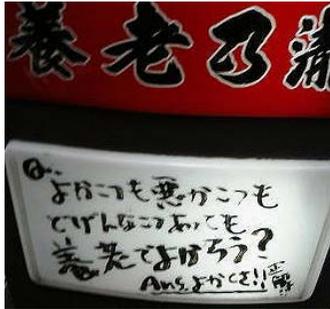
英語の多様性を考察する際に、「XX 英語」の構想にどのような意味があるのかを常に念頭に置かなければ、多様性への寛容な態度とは裏腹に、「均質性」という危うさが生まれるのではないか、そう感じる今日この頃である。

Q.  
よかにつも  
悪かにつも  
どげんなこつ  
あつても  
養老でよかろう？

Ans.  
よかくさ!!

正解

(JR 博多駅 博多口近くの居酒屋にて)



「もってまっか  
警戒心  
狙われてんで  
そのカバン!!」

(大阪府浪速  
警察署前にて)

## 外国人への言語サービスを考える

多言語コミュニティ放送局「FMわいわい」の紹介

樋口謙一郎 (早稲田大学)

第 17 回全国大会の開催地となった神戸には、「FM わいわい」という多言語コミュニティ放送局がある。コミュニティ放送とは、市区町村内の一部地域で地域密着型の情報を提供する FM 放送で、FM わいわいは、阪神大震災のときの在日外国人向け情報提供活動を契機に設立された。現在、神戸市のなかでも特に在日外国人が多く居住する長田区を主なサービスエリアとし(ただし、インターネット放送などにより実際の聴取者は全国に及ぶ)、日本語のほか、韓国語、ベトナム語、タガログ語、中国語、英語、スペイン語、ポルトガル語、タイ語の9言語で放送を行っている。

この放送局の組織がまた興味深い。FM わいわいは、IT、高齢者・障害者の自立支援、外国人コミュニテ

ィ活動などを行う他団体とともにネットワーク型の NPO 法人「たかとりコミュニティセンター」を構成し、相互にミッションや人員をシェアしている。同センターは阪神大震災時のボランティア活動の拠点が発展して法人化したもので、現在は多文化共生のまちづくりをめざす諸団体の拠点となっている。つまり、FM わいわいは放送局単体というより、多文化・多言語社会を目指す市民ネットワークを基盤としている。コミュニティ放送が人員や財政など運営面で多くの困難を抱えているなか、FM わいわいのこのネットワークは物理的にも理念的にも強みとなっている。

FM わいわいの活動で最近全国的に注目を集めたのが、中越地震(2004年10月)の際の多言語災害放送支援である。被災した新潟県長岡市のコミュニティ放送局「FM ながおか」などと連携し、新潟発の原稿を神戸のボランティアが多言語に訳して録音し、ホームページに載せ、新潟の局がダウンロードして放送した。内容は、地震の説明から交通情報、車内生活で起こる「エコノミークラス症候群」に対する注意喚起、外国人でも避難所に入れることなど多岐にわたった。まさに FM わいわいの経験とコミュニティ放送としての機動力の発揮であった。リスナーからは「母国語が聞けてうれしかった」などの反響があったという。

FM わいわいの日比野純一代表は「災害時は1秒でも早く情報がほしい。〔長岡でも〕体制が整っていればすぐに放送できた。10年もたったのに、神戸からノウハウを伝えに行かなければならないとは..」と述べる(『神戸新聞』2005年1月25日付)。この点が難しいところだ。震災から生まれたこの放送局から学ぶべきことは多いが、地域・市民の多言語活動ネットワークを基盤とした FM わいわいの仕組みを、他所が真似することは難しい。災害時の外国人への言語サービスの重要性は強調して余りあるが、コミュニティ FM に限らず地域メディアの多くは、大震災ですべてを失うような経験を組織の出発点としているわけではない。

同代表は「ニュースだけでなく、音楽や娯楽番組があつていい。読み手になまりがあつていい。とにかく始めることが大切。行政も、災害時は多言語放送を予算化するなどしてほしい」と指摘する(同)。多言語社会化の認知と参画、そして行政のマネジメントが必要だということだ。まさに公共政策としての言語サービスの必要性についての問題提起といえるが、その理念やコスト、官民の関係について、い



Kirkpartick (オーストラリア: Curtin University of Technology), Week 8 は Prof. Maria Lourdes S. Bautista (フィリピン: De La Salle University), Week 9 は Prof. Saran Kaur Gill (マレーシア: Universiti Kebangsaan Malaysia), Week 10 は Dr. Ho Wah Kam (シンガポール: SEAMEO RELC), Week 11 は Prof. Hu Wenzhong (中国: Beijing Foreign Studies University), Week 12 は Prof. Jia Yuxin (中国: Harbin Institute of Technology) と、著名な先生方が担当しています。

また、各講師自身がテキストを朗読する音声を収録した CD-ROM が添付されていますので、「国際言語としての英語」の音声的バラエティを確認する資料としてご活用ください。その他詳細は URL

[http://www.bookpark.ne.jp/cm/pudding.asp?content\\_id=ALCB0037](http://www.bookpark.ne.jp/cm/pudding.asp?content_id=ALCB0037) まで



『ことばとアイデンティティ：ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し』

小野原信善・大原始子編著

三元社, 2004年

ISBN 4-88303-145-4

価格: 2,300円+税

紹介者: 榎木薫鉄也

(秋田県立大学)

本書は、本学会会員も含む7人の社会言語学者によって執筆されている。本書の内容は、マニラのエリート校と一般校の生徒の言語意識調査の事例(第1章)、フィリピンのセブアノ多言語話者の事例(第2章)、インドと在日インド社会の事例(第3章)、シンガポール国立大学生へのアンケートを基にした事例(第4章)、北アメリカ先住民少数言語の事例(第5章)、ニュージーランドの先住民の事例(第6章)、在金沢フィリピン人の事例(第7章)、と盛りだくさんである。

本書では、ことばとアイデンティティの解釈が執筆によって異なっている。編著者によると、あえて統一をしなかったそうだ。そのことが、ある意味、本書を面白くしている。例えば、本書では執筆者の多くが言語の「実用的機能」(河原, p.193)を肯定的にとらえて言語とアイデンティティの関係を論じている。従って、「人はまず生きねばならない。

(中略) 職を得るため(生活のため)に必要なとされる言語が自分の母語と違う時、彼らはいとも簡単に

母語を捨てる」(小野原, pp.22-23), 「話者の持つ志向性が最も適当であると思われる言語を状況に応じて話者に選び取らせる」(小張, p.68)などとさりりと書かれている。書名から母語とアイデンティティの感傷的で密接な関係を想起する人は少マドキリとするかもしれない。

一方で、言語の「自己確認機能」(河原, p.193)の面からの考察もされている。例えば、第5章では、北アメリカでの少数言語抹殺の歴史を踏まえて、言語の「実用的機能」以外に「自己確認機能」の重要性を論じている。いずれにしても、「実用的機能」と「自己確認機能」の両方の視点が、非母語英語であるアジア英語の研究にも非常に重要であると、あらためて感じさせられる。

本書の大きな特徴は、執筆者がフィールド調査で収集した資料をもとに論を展開していること、それに、母語を論ずるときに陥りがちな感傷的な態度に陥らず、社会・歴史・言語選択の実例を踏まえて冷静に分析していることである。本書を通じて、読者は、母語への執着も決別も、言語に内在する要因よりも、経済や教育などの社会的要因に左右されることが多いことをあらためて理解するであろう。

## 新 刊 案 内

『はじめてのピシン語：

パプアニューギニアのことば』

岡村 徹著

三修社 ISBN 4-384-05308-8 価格: 1,800円+税

本書は、パプアニューギニアで最も普及している、共通語(トクピシン)を紹介したものである。全部で500の例文が紹介されている。[構文解説]のところでは、平易なことばで文法の説明がなされている。[主な単語]では、200の基本語彙が取り上げられている。また言語の習得とあわせて、[生活知識]の学習もおこなえるようになっている。



『カナダの継承語教育

—多文化・多言語主義をめざして』

シム・カミズ&マルセル・ダネシ著

中島和子・高垣俊之訳

明石書店 ISBN4-7503-2098-価格:2200円(税込)

カナダは多文化、多民族国家である。本書はその公用語である英語とフランス語(および先住民の言語)以外の言語である「継承語」の教育の歴史を記述し、その理論的背景を明らかにしたものである。1980年代を中心に、一筋縄ではいかない、複雑な言

語政策と言語教育の光と影を鋭く捉えている。緩やかに多言語化するここ日本においても、言語教育先進国、カナダの取り組みが示唆するところは決して少なくない。



『ピアで学ぶ大学生の日本語表現  
プロセス重視のレポート作成』  
大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ  
高橋淑郎・岩田夏穂 著  
ひつじ書房 ISBN4-89476-229-3  
価格 1,680 円 (税込)

## 事務局からのお知らせ

### ①会計報告

#### 日本アジア英語学会 2004 年度決算

収入 (円)			
費目	2004 年度 決算額(A)	2004 年度 予算額(B)	増減(A-B)
年会費	761,000	1,370,000	△609,000
全国大会	120,500	300,000	△179,500
(第 15 回電通)	(59,500)		
(第 16 回宮崎)	(61,000)		
モノグラフ紀要売上	20,610	20,000	610
大会補助金 (宮崎産 業経営大学より)	150,000	100,000	50,000
その他 (貯金利息など)	594	0	594
前年度繰越金	1,209,534	1,209,534	0
合計	2,262,238	2,999,534	△737,296

支出 (円)			
費目	2004 年度 決算額(A)	2004 年度 予算額(B)	増減(A-B)
通信費	224,734	200,000	24,734
ニュースレター印刷費	123,900	110,000	13,900
紀要制作費	228,375	300,000	△71,625
文房具	18,145	10,000	8,145
全国大会	251,399	200,000	51,399
人件費	41,100	30,000	11,100
インターネット接続費	23,640	24,000	△360
印刷代 (学会封筒)	21,052	40,000	△18,948
事務局運営費	111,180	100,000	11,180
理事会運営費	80,630	0	80,630
モノグラフ補助費	100,130	200,000	△99,870
研究助成金	200,260	200,000	260
分科会助成金	0	200,000	△200,000
次年度繰越金	837,693	1,385,534	△547,841
合計	2,262,238	2,999,534	△737,296

上記の通り、ご報告いたします。

2005 年 6 月 25 日 会計 河原俊昭  
2004 年度決算報告の監査を行った結果、適正であると認めます。

2005 年 6 月 25 日 会計監査 矢野安剛  
会計監査 森住 衛

## 日本「アジア英語」学会 2005 年度予算

収入 (円)			
費目	2005 年度 予算額(A)	2004 年度 予算額(B)	増減(A-B)
年会費	1,180,000	1,370,000	△190,000
(正会員 200 名)	(1,000,000)	(1,250,000)	
(学生会員 30 名)	(90,000)	(90,000)	
(法人会員 3 名)	(90,000)	(30,000)	
全国大会	300,000	300,000	0
モノグラフ売上	20,000	20,000	0
大会補助金	100,000	100,000	0
前年度繰越金	837,693	1,209,534	△371,841
合計	2,437,693	2,999,534	△561,841

支出 (円)			
費目	2005 年度 予算額(A)	2004 年度 予算額(B)	増減(A-B)
通信費	250,000	200,000	50,000
ニュースレター印刷費	120,000	110,000	10,000
紀要制作費	300,000	300,000	0
文房具	10,000	10,000	0
全国大会	250,000	200,000	50,000
人件費	40,000	30,000	10,000
インターネット接続費	24,000	24,000	0
印刷代	40,000	40,000	0
事務局運営費	100,000	100,000	0
モノグラフ補助費	200,000	200,000	0
研究助成金	200,000	200,000	0
分科会助成金	100,000	200,000	△100,000
10 周年記念事業費 立金	500,000	0	500,000
次年度繰越金	303,693	1,385,534	△1,081,841
合計	2,437,693	2,999,534	△561,841

### ②2005 年度研究助成プログラム

アジア英語に関する研究を振興・奨励するために、会員に対する研究助成を 2006 年度も引き続いておこないます。申請期間は、2006 年 1 月 1 日(土)から 1 月 31 日(月)(消印有効)です。申請書及びプログラム規程は現在も学会の URL からダウンロードできますが、最新版は夏休み中に更新いたしますので、10 月以降に学会 URL からダウンロードしてください (<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae/grantpage.htm>)。なお、審査は 5 名の審査委員による匿名審査でおこなわれます。

### ③10 周年大会について

現在、2007 年の第 21 回大会を学会設立 10 周年大会として開催する計画を立てております。10 周年大会記念事業として、会員参加型の出版事業と海外機関との学術提携の計画をしております。会員の皆様からも、記念事業のアイデアを受け付けておりますので、ご提案があれば事務局までご連絡ください。

### ④住所変更について

学会からの送付物にはヤマト運輸のメール便を利

用しています。住所変更届けを郵便局に提出してあっても、メール便は転送されません。住所に変更がありましたら、事務局までご一報願います。

### ⑤モノグラフシリーズ第3号刊行のお知らせ

7月下旬にモノグラフシリーズ第3号が刊行されました。モノグラフシリーズは購入希望者のみに販売しております。ご購入を希望される方は、事務局までご連絡ください。

価格は、第1号が1部600円、第2号と第3号は1部500円です。モノグラフシリーズ所載論文のタイトルは学会のウェブに掲載しています。

<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae/kiyoumononew.htm>

### ⑥第18回全国大会について

第18回全国大会は2005年12月3日(土)に京都外国語大学(京都市右京区西院)にて開催致します。大会実行委員長は同大学の相川真佐夫理事です。

大会では、国立台湾師範大学の張武昌教授(Dr. Vincent Chang)をお呼びし、特別講演を予定しております。どうぞ、お楽しみに。

#### 第18回全国大会研究発表者募集

第18回全国大会(2005年12月3日(土)、京都外国語大学)で研究発表を希望される方は、要旨(日・英どちらか)をWORDで1枚にまとめ、10月3日(月)までに大会担当理事の榎木蘭まで電子メールにてお送りください。htenokizono@yahoo.co.jp

#### CALL FOR PAPERS for the 18<sup>th</sup> National Conference on December 3rd, 2005 at Kyoto University of Foreign Studies

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is accepted only by e-mail. Please write a 1-page abstract with MS WORD and e-mail it to Professor Enokizono at [htenokizono@yahoo.co.jp]. The deadline is Monday, October 3, 2005.

## 紀 要 編 集 委 員 よ り

学会紀要『アジア英語研究7号』が刊行されました。7号は論文2件、シンポジウム報告1件、書評1件を掲載しています。8号の投稿締切は2005年11月30日です。投稿規程は学会紀要の末尾とホームページに掲載されていますので、ご投稿をお待ちしています。応募論文は会員の方々から3名の査読委員を依頼し、その報告に基づき委員会で採否を決定しています。査読者のコメントは名前を伏せ、採否に関わらず著者にお知らせしています。

モノグラフの原稿も随時受け付けています。1件

につき10万円まで学会の補助があり、年2件までの予算枠があります。近々2点のモノグラフが刊行される予定です。

現在の紀要担当理事は加藤三保子・津田早苗・日野信行・吉川寛です。4年間編集長を務められた吉川理事から津田にかわりました。よろしく願いいたします。

紀要・モノグラフ原稿の送付先：

〒468-8514 名古屋市天白区中平 2-901

東海学園大学人文学部 津田早苗研究室内

日本「アジア英語」学会紀要編集委員会

問い合わせ先：tsuda@tokaigakuen-u.ac.jp

(2005年4月からアドレスが変更になりました)

## ウ エ ッ プ 担 当 理 事 よ り

このたび日本「アジア英語」学会は独自のドメイン名を取得することにいたしました。現在、webをホスティングする会社と契約を進めております。このNLがお手元に届く頃には新しいドメイン名での運用が開始される予定です。ドメイン名に関しましては現在契約を完了していない関係で公表できませんが、現在のURLからリンクされるように致します。

新しいURLでの日本「アジア英語」学会の活動にも今まで通りのご支援をよろしくお願い致します。

ML・ウェブ担当理事 徳地真二

## ニ ュ ー ズ レ タ ー 編 集 担 当 よ り

今回のJAF AE ニュースレター18号は、1月中旬発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報・画像、海外の新聞記事紹介など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、800~1,200字程度で奮って投稿下さい。

自分が知っているだけではもったいない、是非誰かと情報を共有したい、そんな情報をお持ちのあなた。どうかこの機会を通じてシェアして下さい。毎号、3件以上を目標に集めたいと思います。ご協力お願い致します。

書いてみようというご意志がありましたら、12月上旬までに編集担当(相川, aikawa@nnc.or.jp)までお知らせください。

## 国 際 会 議 情 報 ( ア ジ ア 周 辺 )

AMEP NATIONAL CONFERENCE 2005,  
"PATHWAYS TO THE FUTURE"

Place: Macquarie University, Sydney, Australia

**Date:** September 29-October 1, 2005

For further information, contact the conference secretariat: Fax +612 9290 2444. E-mail nsw@icms.com.au

or visit

<http://www.nceltr.mq.edu.au/conference/index.html>

**FEELTA'S 10TH ANNIVERSARY SYMPOSIUM:  
"THE ROLE OF TEACHERS' ASSOCIATIONS IN  
PROFESSIONAL DEVELOPMENT IN ENGLISH  
LANGUAGE TEACHING"**

**Place:** Far Eastern National University, Vladivostok

**Date:** September 30-October 2, 2005

FEELTA, the Far Eastern English Language Teachers' Association, is a professional association for English teachers in the Russian Far East. For further information, contact Professor Lovtsevich Galina at [lovtsev@ext.dvgu.ru](mailto:lovtsev@ext.dvgu.ru)

<http://www.readingmatrix.com/onlineconference/index.html>

**13TH KOREA TESOL INTERNATIONAL  
CONFERENCE: "FROM CONCEPT TO CONTEXT:  
TRENDS AND CHALLENGES"**

**Place:** Sookmyung Women's University, Seoul, Korea

**Date:** October 15-16, 2005

For further information, contact [kotesol\\_conf@yahoo.com](mailto:kotesol_conf@yahoo.com)

Or visit <http://www.kotesol.org/2005>

**INTERNATIONAL CONFERENCE ON CRITICAL  
DISCOURSE ANALYSIS: THEORY INTO  
RESEARCH**

**Place:** Tasmania, Australia

**Date:** November 9-11, 2005

For further information, visit:

<http://www.educ.utas.edu.au/conference>

**SPEAQ ANNUAL CONVENTION 2005,  
"CULTURALLY SPEAKING"**

**Place:** Hilton Bonaventure Hotel, Montreal, Quebec, Canada.

**Date:** November 10-12, 2005

For further information, contact Diane Hamel, Director of Convention, Fax +1-514- 271-4587

E-mail: [speaq@aquops.qc.ca](mailto:speaq@aquops.qc.ca)

Or visit <http://www.speaq.qc.ca/>

**THE 14TH INTERNATIONAL SYMPOSIUM AND  
BOOK FAIR TO ENGLISH TEACHING HOSTED  
BY ENGLISH TEACHERS' ASSOCIATION  
TAIWAN (ETA-ROC), "BRIDING THE GAP:  
TEACHING AND LEARNING"**

**Place:** Chien Tan Overseas Youth Activity Center, Taipei, Taiwan

**Date:** November 11-13, 2005

For further information, contact Andy Leung at [etaroc2002@yahoo.com.tw](mailto:etaroc2002@yahoo.com.tw)

Or visit <http://www.eta.org.tw/>

**FACULTY OF COMMUNICATION AND MODERN  
LANGUAGES, UNIVERSITI UTARA MALAYSIA.  
INAUGURAL INTERNATIONAL CONFERENCE  
ON THE TEACHING AND LEARNING OF  
ENGLISH IN ASIA: TOWARDS AN ASIA  
PERSPECTIVE**

**Date:** November 14-16, 2005

For further information, contact the conference chairperson at [syaharom@uum.edu.my](mailto:syaharom@uum.edu.my)

Or visit <http://www.uum.edu.my/fkbn/leia1>

2005年7月30日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

発行 (有)タナカ企画

事務局

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘 1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550 E-mail: [tina2@gol.com](mailto:tina2@gol.com)

学会ホームページ:

<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

**Prof. Hiroko Tina Tajima**

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525

JAPAN

FAX: 03-3326-4550

E-mail: [tina2@gol.com](mailto:tina2@gol.com)

JAF AE's homepage:

<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239